

階層別研修、定着促進へ 早期離職防止研究で優秀賞受賞

第22回〈ゆうゆうの里〉職員実践研究会



日本老人福祉財団
小口明彦理事長

開会式で小口明彦理事長は「当財団は2023年12月に創立50周年を迎えることができ、次の100周年に向けて新たな第一歩を踏み出す」と話した。

介護付有料老人ホームを全国で7事業所展開する一般財団法人日本老人福祉財団（東京都中央区）は2月21日、第22回「ゆうゆうの里」職員実践研究会を開催。135名が来場し、全20チームが研究発表を行った。優秀賞は離職防止をテーマにした本部人事総務課など4組が受賞した。

職員実践研究発表会は午前と午後の2部制で、20の演題を発表。優秀賞は午前と午後からそれぞれ2演題が選出された。審査員は外部の有識者と同財団職員が務めた。

優秀賞に選出されたのは、浜松へゆうゆうの里V生活サービス課、伊豆高原へゆうゆうの里Vケアサービス課、本部人事総務部の4チーム。



▲50周年記念した節目の年の研究発表会

現場の取り組みについての研究発表が多い中、唯一本部から優秀賞に選出された本部人事総務部は「早期離職率を上げる仲間づくり」の題で発表を行った。早期離職を防止するために1〜3年目標修や新入職員フォローアップ研修などの階層別研修を実施。内定から入職までの期間に複数回の懇親会を開催し



▲研究についてアドバイスをする中央福祉学院山下興一郎主任教授（左）と法政大学松浦民恵教授（右）

た。新卒18年度入社組の定着率は1年後に78・6%、3年後57・1%であった。取り組みが軌道に乗った20年度入社組の定着率は1年後93・3%、3年後は80%を達成した。

本部人事総務部の木曾千枝加氏は「今回、離職率をテーマにした研究活動をするにあたり、人事総務部チーム一丸で15年分のヒアリングシートを全て分析した」と話す。

また、会場の参加者の投票で選ばれた会場の賞は大阪へゆうゆうの里V生活サービス課が受賞。同事業所は「私だって参加したい！」新企画『かたつむりツアー』と題し、軽度認知障害などの利用者向けに外出イベントを開催した事例を紹介。かたつむりツアーは21年4月から23年5月まで計3回実施。イベント参加に消極的になった利用者を楽しんでもらえるようにという思いで取り組んだ。「ツアーをきっかけに利用者同士つながりが深まった」と生活サービス課の門田拓也氏は述べた。

また、会場の参加者の投票で選ばれた会場の賞は大阪へゆうゆうの里V生活サービス課が受賞。同事業所は「私だって参加したい！」新企画『かたつむりツアー』と題し、軽度認知障害などの利用者向けに外出イベントを開催した事例を紹介。かたつむりツアーは21年4月から23年5月まで計3回実施。イベント参加に消極的になった利用者を楽しんでもらえるようにという思いで取り組んだ。「ツアーをきっかけに利用者同士つながりが深まった」と生活サービス課の門田拓也氏は述べた。

発表会終了後はトクセクション「研究のタネの育て方」を開催。法政大学キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科の松浦民恵教授と、全国社会福祉協議会・中央福祉学院の山下興一郎主任教授が登壇。身近な課題から研究テーマを見つけるためのコツをフリートーク形式で議論した。「研究の『タネ』を育てたいけど、タネが見つからない」という職員の質問に対して、山下主任教授は「現場で起きている課題を研究のタネとして取り扱うことが大切」と言及。また松浦教授は「自分の土俵に引き寄せて、オリジナリティのあるテーマを探し出すことがタネを見つけるポイント」と話して今後の研究の進展に期待を寄せた。